



ゆにふ^あんレポート 2022-2023



目次

巻頭言

■ 「ワクワク感」のある笑顔あふれる社会貢献活動へ	1
---------------------------	---

■ ゆにふぁんとは	2
-----------	---

活動の振り返り

■ 数字と写真で見るゆにふぁんレポート ～これまでのあゆみ～	4
--------------------------------	---

事例紹介

01 JP 労組

■ 全国で福祉型労働運動を展開する体制と仕組みづくり	18
----------------------------	----

02 連合長野

■ 30 年以上続く環境活動 連合長野の森づくり	20
--------------------------	----

03 栃木・わんにゃん応援団

■ クラウドファンディングで 100 匹以上の野良猫を救う	22
-------------------------------	----

ゆにふぁんフォーラム

基調講演

■ 社会、個人、企業「三方良し」の社会貢献 連合総研 主席研究員 中村 天江	27
---	----

■ ボランティアの楽しみ方、広げ方 グリーンバード 代表 福田 圭祐	29
---------------------------------------	----

■ ごみ拾い活動を促進するプラットフォーム 株式会社ピリカ PR 土屋 明子	30
---	----

パネルディスカッション

■ これからのゆにふぁんの在り方	32
------------------	----

資料

■ ゆにふぁん活動の記録	38
--------------	----

おわりに

■ 社会課題解決に向けた支え合い・助け合い活動の結節点として	40
--------------------------------	----

「ワクワク感」のある 笑顔あふれる社会貢献活動へ

日本労働組合総連合会 副事務局長 山根木晴久

労働組合は、組合員の労働者としての権利、雇用や労働諸条件を守り向上するために存在しています。しかし活動はそれだけではありません。平和や人権を守る活動、地域における社会貢献活動を多くの労働組合が行っています。それはなぜか。突き詰めれば、組合活動を通じて培われた支え合い助け合いの精神が労働組合の DNA に埋め込まれたからだと考えます。

ゆにふぁんロゴ（ゆにふぁん）で強調されている「あ」に込められた「気づき」や「思いやりの心」、それを突き動かす「好奇心」こそ、すべての活動の原点ではないでしょうか。

近頃、個人と企業、行政との間に存在する「中間組織」の衰退が社会を弱体化させていると指摘されています。自治会・町内会やこども会、PTA、そして労働組合も含め組織率が低下しています。これまで「共助」、すなわち支え合い助け合いのシステムを担ってきた存在の機能低下が、おのずと「自助」に頼らざるを得ない社会に向かわせているのではないのでしょうか。

労働組合の組織率の低下に歯止めがかからない昨今ですが、それでも全国各地で連合の仲間の奮闘が続いています。ゆにふぁんマップに掲載された取り組みは既に 600 件を超えており、2 年前のレポートで報告した 400 件から大きな広がりを見せています。私たちの社会貢献活動は、ゆにふぁんのネーミングに込められた「ユニオン」の「ファンづくり」に大いにつながる活動です。もちろん社会貢献活動は労働組合のアピールのために行うものではなく、社会のお困りごとに少しでも貢献したいという思いで行うものですが、結果としてそれが労働組合への理解や好感度の向上、さらには仲間づくりにつながるものでもあると考えています。

ゆにふぁんの取り組みをはじめから 4 年が経過しました。これからの挑戦テーマは、「使命感」から「ワクワク感」への進化だと考えています。社会貢献活動は尊い活動であり、労働組合の使命感にもマッチするものですが、より多くの仲間が集まり、長く続けていくことができる活動にするためには、楽しそう、面白そうなど、好奇心をくすぐり、ワクワク感をもってもらえるようにしたいものです。笑顔あふれる運動に、まずは身近な課題から。

これからもゆにふぁんをよろしくお願いします！

ゆにふぁんとは

労働組合やNPO・NGOなどの団体が行う支え合い・助け合いの活動を
WEBサイト「ゆにふぁんマップ」へ掲載することで
それぞれの活動を知るとともに、個人の意思で参加や支援ができる仕組みです。



「ゆにふぁんマップ」でできること

- 活動の紹介
- ボランティア・イベントの参加募集
- 募金・寄付金の募集
- 物資支援の募集
- クラウドファンディング



社会貢献活動の分野

- | | |
|------------|--------------|
| 働く人を応援 | フードバンク・子ども食堂 |
| 貧困から守る | |
| 教育・子育てを応援 | 地域を元気に |
| | 被災地を応援 |
| 障がい・介護を支える | 動物を守る |
| 自然を守る | その他 |

掲載できる団体と構成組織・地方連合会の役割

「支え合い・助け合い運動」に取り組んでいる下記の組織・団体など。
なお、連合本部・構成組織・地方連合会以外の団体の場合は、連合本部、構成組織、地方連合会の推薦が必要となります。

- 連合本部
- 構成組織
- 地方連合会
- 単組
- 地域協議会
- NPO・NGOなどの団体

掲載にあたっての役割

- 実施団体
構成組織・地方連合会が主団体となる活動
- 推薦団体
・単組・地域協議会が主団体となる活動
・NPO・NGO等団体が主団体となる活動

活動を盛り上げる仕組み「いいね！」

- 頻繁に活動状況を更新することで活発なサイトに！
写真やコメントを更新しましょう。
- ユーザーは「いいね！」ボタンで活動を応援！



ゆにふぁんがつなぐ・創り出す・民の力



ゆにふぁん発展に向けて～ロードマップ～

- STEP 1** 組織内・連携する 諸団体の活動を見る化
- STEP 2** 諸団体との 連携・参加・参画につなげる



- STEP 3**
- 支え合い・助け合いの活動へ参加・参画を通じて共感・喜び・やりがいを感じる
 - 諸団体、地域、市民と労働組合のつながりを深める
 - 参加を通じて当事者意識の醸成と社会課題解決への行動につなげる

→ ゆにふぁんが結節点に

ゆにふぁん

- 正式名称 「ゆにふぁん～支え合い・助け合い運動～」
- 愛称 「ゆにふぁん」 支え合い・助け合いの活動を通じて“ユニオンのファンを増やしたい”という想いが由来。ひらがなで親しみやすさを表現。
- ロゴマーク(一般公募) ユニオンの「U」を重ね合わせて、人が支え合い助け合う様子と、助けを求める声に気付く「あ！」という意味を込めている。

ゆにふぁん Webサイト



数字と写真で見る ゆにふぁんレポート ～これまでのあゆみ～

ゆにふぁんマップで見える化 ～ 600 件を超える活動

2023年6月時点

マップ掲載
計 619 件

構成組織
377 件 (13 組織)

地方連合会
229 件 (47 組織)

連合本部
13 件

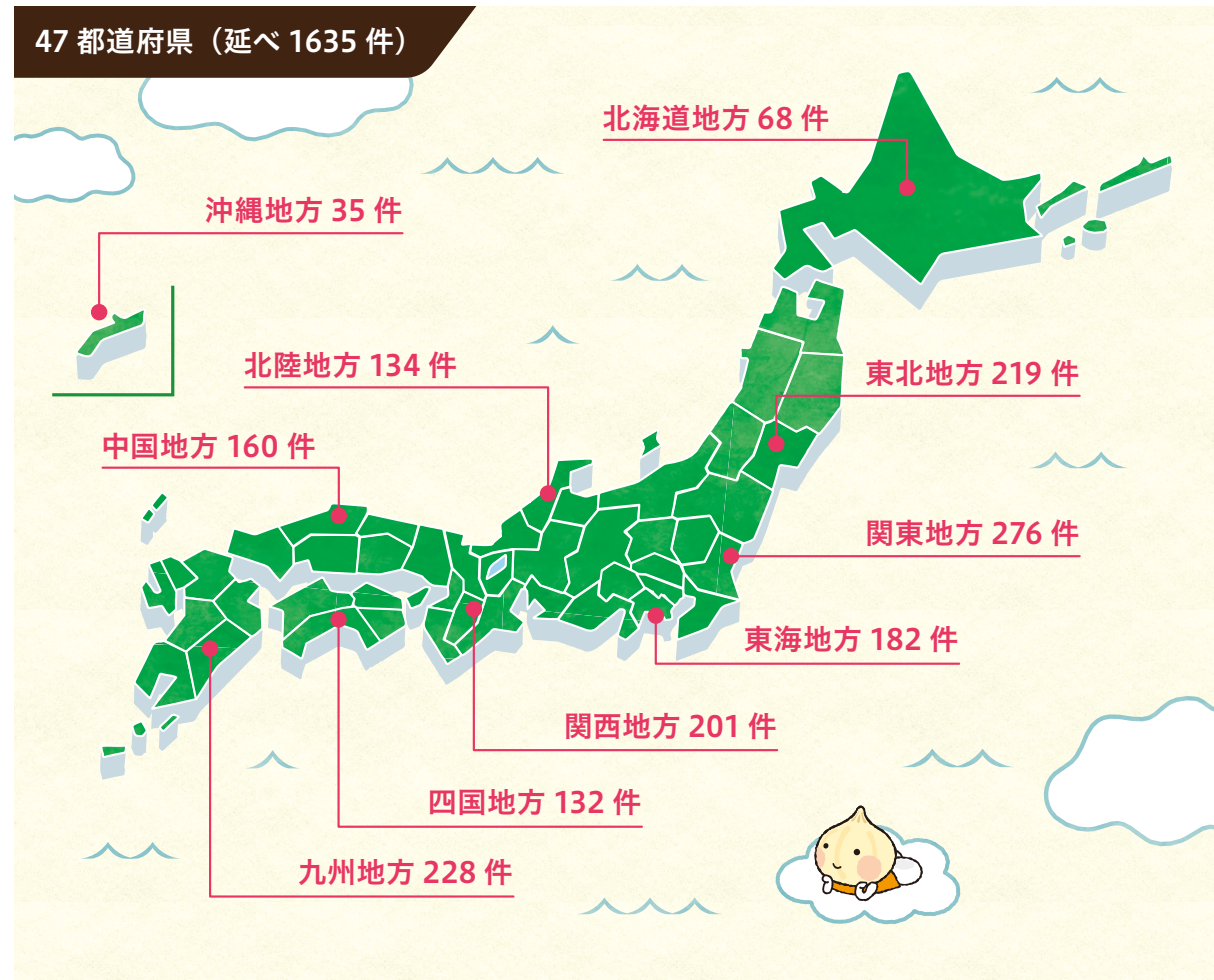
(うち外部団体 36 団体・53 件)

※実施団体・推薦団体登録含む

地域や組織を越えて ～ 日本全国で支え合い・助け合い

活動地域別

2023年6月時点



多様な支え合い・助け合いの活動

活動分野別

2023年6月時点

働く人を応援

32 件



フードバンク・子ども食堂

38 件



貧困から守る

44 件



地域を元気に

58 件



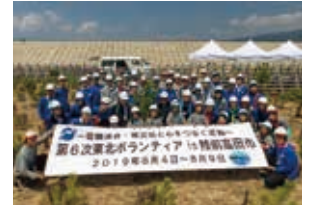
教育・子育てを応援

28 件



被災地を応援

46 件



障がい・介護を支える

219 件



動物を守る

3 件



自然を守る

86 件



その他

65 件



多様な支え合い・助け合いの活動

トピック① ゆにふぁんでつなぐ『食』の支援

フードバンク活動

フードバンクとは

企業や団体から、まだ安全に食べられるのに商品入れ替えや包装不備、災害備蓄品の入れ替えなどで廃棄されてしまう食品を引き取り、福祉施設などへ無償で提供する団体・活動。

掲載事例

- ◆食品（災害備蓄品）の寄付（寄付先：フードバンク、社会福祉協議会、母子寡婦会など）
- ◆カンパなどでの資金援助（寄付先：子ども食堂、フードバンクなど）
- ◆フードバンクでの食品仕分けボランティア



▲災害備蓄品を母子寡婦会に寄付
(連合青森)



▲フードバンク・子ども食堂へのカンパ
(連合東京)



▲フードバンクでの仕分け作業
(連合山梨)

フードドライブ活動

フードドライブとは

各家庭で使い切れない未使用食品を持ち寄り、それらを取りまとめてフードバンク団体や地域の福祉施設・団体などに寄贈する活動。

掲載事例

- ◆メーデー・イベント会場でのフードドライブの実施・寄付（寄付先：フードバンク、社会福祉協議会、NPO、公益財団法人など）
- ◆組合員からお米を1合ずつ集めてフードバンクへ寄付
- ◆フードドライブ用食品回収ボックスの寄付



▲フードドライブの実施
(連合茨城)



▲お米1合を集め、フードバンクへ寄付
(連合栃木)



▲フードドライブ回収BOXの贈呈
(連合滋賀)

トピック② ゆにふぁんの仲間たちと『環境保護』

掲載事例

- ◆清掃・除草・除雪（各種支援施設、被災地、公園、ビーチ、河川敷、通学路、職場周辺、運動場、埠頭、郵便ポスト、カーブミラー、イベント、独居老人宅、高齢者宅など）



▲カーブミラー清掃
(連合滋賀第3地協)



▲公園・駐車場清掃
(連合福島)



▲トライアスロン形式での清掃
(岡山県教職員組合東備支部)



▲除雪作業
(連合東京青年委員会)



▲独居老人・高齢者宅の除雪
(札幌地区連合青年委員会)



▲高齢者、障がい者福祉施設の車いす清掃
(JP労組関東地方本部)

- ◆植樹・植栽・森林保護（被災地、地域の山林、公園、海岸、花壇など）



▲被災地での植樹
(電機連合)



▲国有林の間伐作業
(連合茨城青年・女性委員会)



▲花壇の花植え活動
(JP労組関東地方本部)

多様な支え合い・助け合いの活動

トピック③ ゆにふぁんで「こども・若者」を支援

掲載事例

◆各種支援団体への寄付、物資寄贈（ランドセル、衣服、車両など）、交流
（支援先：児童館、母子寡婦会、1人暮らし学生、子ども食堂、大学生協、支援学校、労
福エール基金、世界寺子屋運動、社会福祉協議会、あしなが育英会など）



▲「親子ものづくり教室」キットを贈呈
（連合三重金属部門連絡会）



▲支援学校での交流活動
（JAM 北陸富山県連）

◆地域見守り活動



▲外回り営業での見守り活動
（生保労連）

◆「飛び出し坊や」作り



▲「飛び出し坊や」作り
（連合滋賀第3区地協）

◆子ども向けイベントの出版



▲苦小牧港祭で金魚すくい出店
（JP 労組苦小牧日高支部）



▲子どもイベントとバザー開催
（JP 労組関東地方本部）

トピック④ その他の取り組み

掲載事例



▲街頭での献血呼びかけボランティア
（JP 労組九州地方本部）



▲赤い羽根共同募金ボランティア
（JP 労組オホーツク北支部）



▲「大分国際車いすマラソン」コース清掃・
警備
（連合大分）



▲ケアセンターでのスマホセミナー
（JP 労組南関東地方本部）



▲フォトコンテストの開催
（JP 労組四国地方本部）



▲諫早万灯川祭りボランティア
（連合長崎）



▲福祉施設への未使用タオル寄贈
（連合福島）

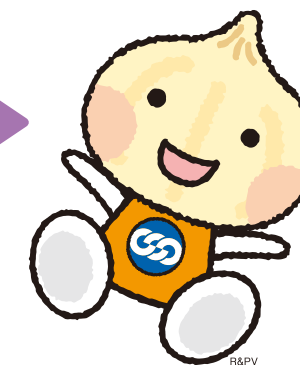


▲「北朝鮮による日本人拉致被害者家族支
援」街頭署名活動
（UA ゼンセン）



▲四国八十八ヶ所2番札所 お遍路さんへ
のお接待
（JP 労組四国地方本部）

全国でいろんな取り組みがあるね！
ゆにふぁんマップには支え合い・助け
合いのアイデアがたくさん掲載され
てるオニオン



多様な支え合い・助け合いの活動

2023年6月時点

ゆにふぁんマップから参加を呼びかけ

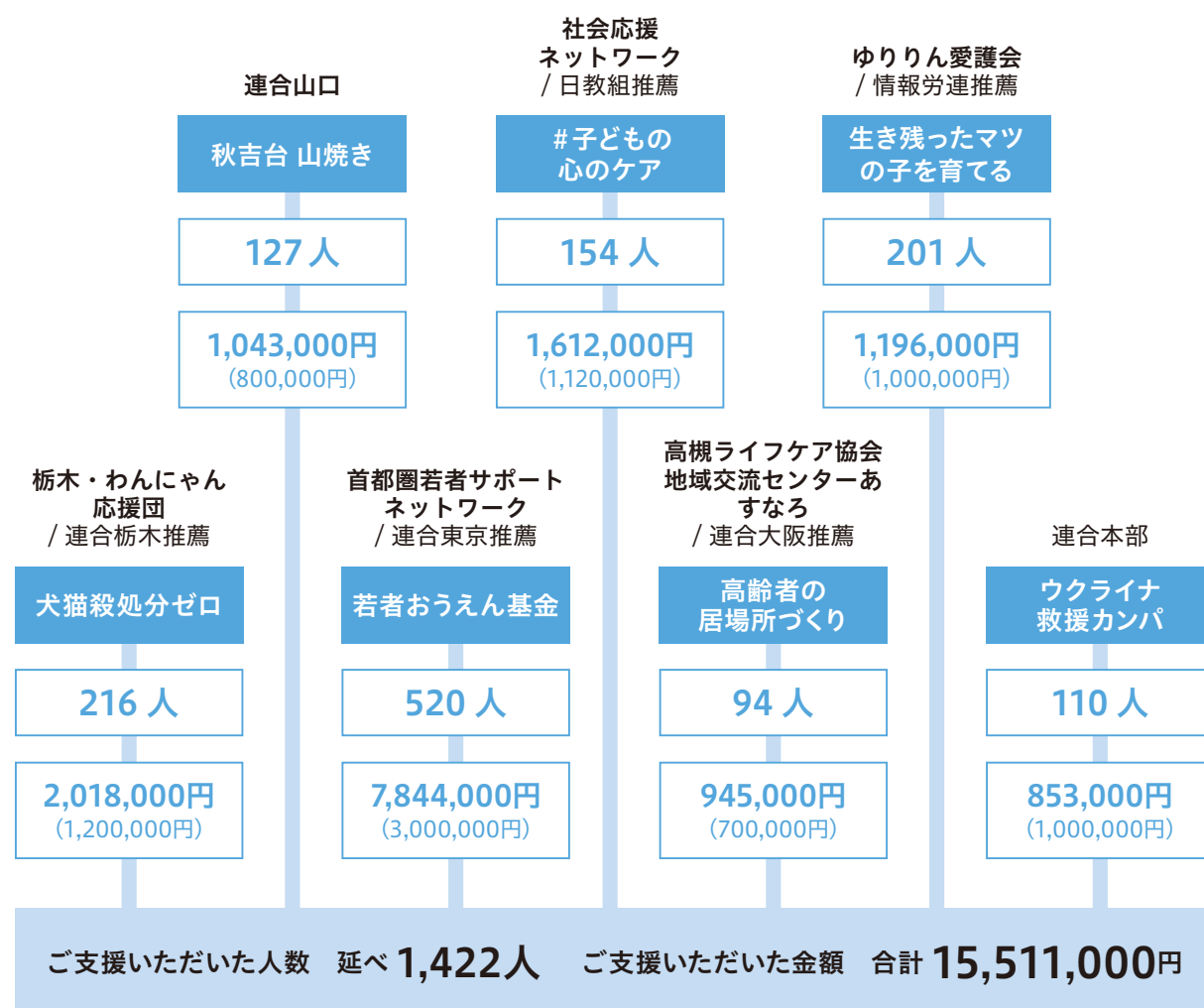
計 75 件



想いに共感・活動を応援 ～クラウドファンディング～

ゆにふぁん × READYFOR

2023年6月時点



※ ()内は目標額

クラウドファンディング の成果

ゆにふぁん × READYFOR

2023年6月時点

山口県美祢市秋吉台。魅力を守る
伝統行事「山焼き」を続けたい。



2019年11月9日(土)に秋吉台山焼き延焼止め草刈りボランティアを実施することができ、550名が参加した。

施設や里親の下で育った若者たちを
サポートする若者おうえん基金



2020年上半期に新型コロナ助成事業など3つの助成事業を行い、延べ87団体 8,767,250円を助成することができた。

【新型コロナ】【災害ストレス】
#子どもの心のケアプロジェクト



全国から寄せられたお悩みに対して専門家に取材し正確な回答を継続的に発信。心のケア情報サイトも立ち上げた。

高齢者の居場所づくり・
地域交流センターの運営と存続支援



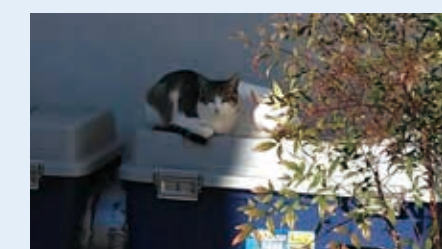
活動資金、感染予防のための環境整備などに有効活用し事業を継続している。

生き残ったマツの子どもたちを
育てよう!



2021年10月23日、31日に仙台市若林区荒浜にて植樹祭を開催。情報労連宮城県協議会をはじめとした参加者56名により、被災地で生き残った黒マツの苗500本が植樹された。

100匹以上の野良猫を救いたい!
～栃木県日光市足尾町～



野良猫103匹は不妊・去勢手術を行い地域猫として、43匹は里親の元で飼い猫として暮らしている。地域に越冬のための猫ハウスを24台設置した。

特設ページ 連合緊急アクション ～くらしをまもり 未来をつくる～

「支え合い・助け合い」の力で
すべての働きくらす人々の
希望をつなごう

2023年6月時点



計 57 件

連合本部の取り組み

連合緊急アクションパレードやメーデーの開催に合わせて、
食品や文具の寄付を受け付け、集まった寄付品を各団体へ寄贈



▲ セカンドハーベストジャパンに食品寄贈



▲ キッズドアに文具の寄贈



▲ フードバンク神奈川に食品寄贈



地方での取り組み



▲ 2022 年々末食糧配布会
『ワクワク年末 お福分け隊』
(沖縄県労協)

ゆにふぁんへのメッセージ



▲ 認定 NPO 法人キッズドア
理事長 渡部由美子氏



▲ 首都圏若者サポートネットワー
ク顧問 村木厚子氏

特設ページ 想いを届けよう ～新型コロナ対策支援～

新型コロナウイルスによって
助けを求めている方々へ想いを届けよう

2023年6月時点

計 92 件

雇用・生活を守ろう 44件



▲ フードドライブ
(フード連合)



▲ シトラスリボン運動
(連合静岡)

感染拡大を防ごう 48件



▲ 介護・福祉施設へマスク寄贈
(連合青森)



▲ 公立学校共済組合直営病院へマスク寄贈
(日本教職員組合)

特設ページ つなげよう未来へ ～東日本大震災から 10 年～

復興支援・防災の取り組みを通じて
震災を風化させない

2023年6月時点

計 24 件



雇用・生活を守ろう 8件



▲ 東北ボランティア in 陸前高田
(電機連合)



▲ 薄磯海岸清掃
(J P 労組東北地方本部)

感染拡大を防ごう 16件



▲ 清掃用タオル回収
(J P 労組東北地方本部)



▲ 常設ボランティアチームの設置
(連合和歌山)

知る・活用する・参加する ～ 情報発信 ～

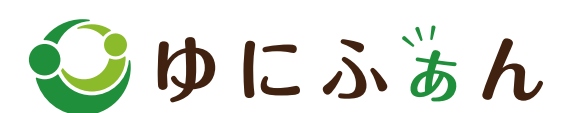
2023年8月時点



これまでも・これからも…
支え合い・助け合い



事例紹介



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS

私たちは持続可能な開発目標
(SDGs)を支援しています



事例紹介 01：JP 労組

全国で福祉型労働運動を展開する体制と仕組みづくり

JP 労組中央本部 組織局
兼久 陽一郎



役員が変わっても活動を継続させる体制づくり

私たちJP労組は、地域に根差した郵政事業で働く組合員で構成されており、長きにわたり地域ではたらく労働者・生活者として地域の皆さんと共に活動する福祉型労働運動に取り組んできました。2007年に「労働組合の社会的責任を果たすため、福祉型労働運動を探索し、推進していく」という思いで取り組みを開始。2013年には、「真に組合員の幸せを実現する」「郵政事業を存続・発展させる」「安心して暮らせる社会を実現する」とした基本理念の実現に向け、この運動の浸透をはかるために呼称を公募し、現在の「JP Smileプロジェクト」になりました。

JP Smileプロジェクトでは、「全機関・1Action」を掲げ、支部・分会の組合員が地域の実情に応じた取り組みを主体的に実践していく活動をめざしています。そこで重要となるのが、支部・分会役員が福祉型労働運動の視点を持つことです。そのために、地方本部では学習会やセミナーを開催し、本部では全国フォーラムを開催しています。フォーラムでは、地域に密着したJP労組だからこそできる地域社会での取り組みが、自分と家族、そして仲間の幸せづくりに繋がることへの理解・浸透に努め、事例共有やグループワーク等を通じて、支部や分会でニーズを察知できる人財を育成しています。加えて、福祉型労働運動の裾野を広げるための実践マニュアルや事例集等を作成・展開することで、支部が新しい企画作りの参考にすることや、活発に活動する近隣の支部と一緒に取り組むことなどを推進しています。

実際の活動は地域性を反映した取り組みとなるため、支部によってさまざまです。私も沖縄地方本部北部支部の支部長として、JP Smileプロジェクトの活性化に努めてきました。過去の事

例を意識しつつも、自分たちがこれからの活動をつくっていくという意識で、役員全員を集めて毎年新しい企画に挑戦してきました。今年はビーチ清掃を企画し、対象地域の自治体とも連携の上、道具やゴミの処分・回収の確認などの事前準備を行いました。当日は多くの組合員とその子どもたちが参加し、トラブルなく無事に終えることができました。子どもたちがまるで宝探しをするようにゴミを拾い楽しむ様子が印象に残っています。地域と連携した運動となっていたのかという点では課題が残ったものの、プロジェクトの実施後に組合員から掛けてもらえた「楽しかった」「またやりたい」という声や感謝、企画への労いの言葉は、次の企画への意欲につながりました。

行動とめざすべき姿の共通認識の両立が重要

福祉型労働運動は、労働組合の活性化に資する活動ですが、組織拡大や職場課題への取り組みなどに比べて、どうしても優先順位が上がりづらい現状があります。特に、まだ一度も活動ができていない支部に初めの一步を踏み出してもらうことは長年の課題でした。そこで2022年度は



▲ 子ども達も夢中になってゴミ拾いを楽しんでいました



▲ ごみかな？虫かな？

「アクションを起こすことから始めよう」と全国一斉行動を掲げ、「全国JP Smileクリーン作戦」を企画。それぞれの地域で、SDGsを意識したカラー（青や緑）を身につけ、海や川などでのクリーン活動を行いました。いくつかの地方では、地元メディアにも取材してもらい、支部や参加する組合員のやる気の高まりや連帯感、仲間意識の醸成、そして地域におけるJP労組の存在感の向上にもつなげることができたと思います。

今後は一斉行動の結果を集約し、そこで出てきた課題に注目・解決をはかることで次の取り組みにつなげていくことになります。このような一斉清掃活動は、地域に根差した福祉型労働運動というJP Smileプロジェクトのあるべき姿とは離れる部分もあったかもしれませんが、組織として一歩踏み出すという面では大きな意味があったと思います。本部としては、改めて福祉型労働運動の意義やJP労組がめざすものの理解・浸透に注力し、組合員の求心力の向上をめざしていきます。また、それぞれの地域に応じた課題を的確にとらえた活動としていきたいです。

JP Smileプロジェクトは、「やるぞ!」という活動ではなく、当たり前のこととして自然に運動の中に取り込まれて、社会や地域から必要とされる存在にしたいと考えています。意識の多様化が進む中で、この取り組みの浸透が組織の活性化にもつながっていくと実感しています。また、私たちのように、地域の皆さんに支えられている事業を担う者は、地域社会や自分たちの存在意義についてもっと考えるべきだと思います。みんなと一緒にこの活動の社会的意義について考えながら、さらに組織としての運動を推進していきたいです。



▲ ビーチ清掃で仲間との交流も深まりました

ゆにふぁんは労働組合の社会的意義を実感し広げていける場所

ゆにふぁんに掲載されている事例を見ていると、各組織が社会的意義を意識した多様な取り組みを実践していると感じますし、仲間と共にその意義について考え、行動していく大切さにも気付かされます。

ゆにふぁんには連合の仲間が取り組む様々な活動が掲載されています。事業性や地域の特性を踏まえ工夫された取り組みの数々であり、福祉型労働運動のヒントもたくさんありました。私自身、コロナ禍において、集まること、活動することが難しくなり、何かできないかと考えていた際、①集まらなくても、②自分たちのペースで、③いつでも取り組むことができる、そういった活動をゆにふぁんで探していたところ、フードバンクにたどり着くことができました。

ゆにふぁんを通じて、地元の団体や社会福祉協議会、全国のNPOなどとも連携・協同することも可能だと思います。若年層の意識調査では、社会貢献活動に関心が高いことが明らかになっています。ゆにふぁんは、そういった若年層の新しい結集軸になるのではないかと期待しています。

私たちと同様に、地域連携の活動に取り組もうとしている組織もあると思いますし、一緒に活動に取り組める団体を探している組織もあるかもしれません。そんな時には、ぜひゆにふぁんを見て、参考にさせていただきたいと思います。

ゆにふぁんをきっかけに、今後さらに多くの組織で支え合い・助け合い活動の輪が広がっていくことを願っています。



▲ みんなで協力してたくさんのごみを集めました

事例紹介 02：連合長野

30 年以上続く環境活動 連合長野の森づくり

連合長野 事務局長 小松 豊
連合長野 副事務局長 おびなた 小日向 茂



環境保全に関する 長野らしい取り組み

連合長野は1992年から「連合長野の森づくり」に取り組んでいます。長野県は土地の約80%が森林に覆われていて、かつては林業が盛んな地域だったことから、連合長野の初代会長であった松田章一氏が地域の特性を活かした労働組合による環境保護への取り組みを検討する中で、分

収造林制度*を活用した森づくりを思いついたそうです。この制度を活用し、国から国有林を借り、連合長野と国で協力して2058年まで森を育て、最終的には育った木を売却し、その収益を環境保護に取り組む団体に寄付する計画です。

また、この活動には、組合員に植樹から伐採まで造林・保育作業に関わってもらうことで、森林の持つ重要性和環境保護の問題を考えてもらい、水と緑の源泉を育み保全していこうという想いが込められています。

継続と展開で次世代に 豊かな自然を残す

木を育てるためには、下草刈りや枝払いで陽当りをよくしたり過密になった木を伐採したりする必要があり、人の手の介入が不可欠。森を育てていくというのは息の長い活動です。連合長野ではこれまで30年以上にわたって、国民運動環境委員会が中心となり、年1～2回は森を訪れて伐採などの活動を続けてきました。しかし、新型コロナウイルス感染



▲入口の立て看板には環境活動への思いが綴られています



▲時には組合員同士で協力し合いながら作業を進めました



▲4年ぶりの現地作業に25人の組合員が集まりました

症の影響で約4年間、活動を休止。2022年ようやく現地での活動を再開できました。さらに、組合員に環境問題への意識を持って伐採作業に取り組んでほしいと考え、事前学習としてSDGsに関する研修を実施しました。

約4年ぶりの活動再開ということもあり、初参加の組合員も多く、伐採作業では道具の扱いや傾斜面での作業に苦戦する姿もありましたが、すぐに慣れ、2時間程度で下草刈りなど森の整備と205本の木を伐採しました。しかし、今回作業ができたのは森のほんの一部。終了後、参加した組合員から、森を育てていくために活動を継続していかなければという声が自然と聞かれました。決して楽な作業ではないのですが、こういった声を聞くことができ、改めて活動を再開できてよかったと実感しました。

約30年にわたる森づくり活動を継続する中で、多くの組合員がこの活動に関わってきました。そして、一人ひとりがこの活動を通して、環境問題に対する意識を高め、自分の身の回りの生活環境を見直すきっかけにできたと思います。今後はこの活動をさらに広げていくことも検討中です。

実は先日、今年度の取り組みに関する会議で、昨年伐採作業に参加した組合員から、貴重な経験になったので家族や子どもも参加させたいという意見が出ました。こういった声を踏まえ、危険も伴う場所なので準備も必要ですが、委員会や地域協議会の役員の参加に限らず、職場の同僚や家族も含めて参加できるようにしたいと考えています。参加者

が、長野の自然が持つ魅力を感じながら、環境保全への関心を高めるきっかけとなるような活動へと発展させていきたいです。また、豊かな自然を次世代へと引き継ぐために、労働組合やボランティアグループはもちろん、企業や行政とも連携して、環境保全活動を展開していきたいと考えています。

プラットフォームとしての ゆにふぁんへの期待

ゆにふぁんマップに掲載したことで、他の地域での活動にも興味を持つようになりました。自分たちが取り組んでいる「支え合い、助け合い」活動や自然を守る活動を、さらに充実させるための参考にしています。今後、森づくりの活動を展開させるためにも活用していきたいです。

また、ゆにふぁんをもっと多くの方に知っていただき、ボランティアやクラウドファンディングのページが活発化すると思っています。森づくりの活動とは異なりますが、私たちは地元で活動するNPOやNGOとも関わる機会が多くあります。そのなかにはボランティアやクラウドファンディングを必要としている組織があるかもしれません。今後は、ゆにふぁんというプラットフォームと地域のために活動している組織をつなげる役割も担っていきたいと考えています。

*分収造林とは、国以外の者（造林者）が契約により、国有林に木を植えて一定期間育て、成林後に分収木を販売し、その収益（販売代金等）を国と造林者とであらかじめ契約した一定の割合で分収する制度です。（林野ホームページより）

事例紹介 03：栃木・わんにゃん応援団

クラウドファンディングで100匹以上の野良猫を救う

一般社団法人栃木・わんにゃん応援団（非営利型法人）
代表理事 松田俊一



不幸な野良猫をこれ以上増やさない そのために資金が必要だった

栃木・わんにゃん応援団は、栃木県での犬猫殺処分ゼロをめざして活動している団体です。野良猫のTNR（Trap・Neuter・Return：捕獲し、不妊・去勢手術を行い、元の場所へ戻す）活動や里親探し、多頭飼育家庭の問題解決に向けた取り組みや、地域猫ボランティア団体の支援などを行っています。

私たちのような団体にとって、費用捻出は大きな課題で

す。保護活動にかかった経費や医療費などを里親に支払ってもらう団体も多いのですが、里親が決まりにくくなるという問題があるため、私たちはできる限りその猫を保護した人に負担してもらうようにしています。協力してくれている動物病院に安い料金で手術してもらったり、市の助成金を活用したりして費用を安く抑えています。保護した人が支払えない場合は私たちが負担しています。一度に複数頭を保護した時は特に費用の問題が大きく、苦慮しています。

ゆにふあんのクラウドファンディングを利用したのは、2021年に日光市足尾町のボランティア団体「にゃんサポート足尾」から相談を受けたことがきっかけでした。足尾町では他地域から猫を捨てに来る人もいて、当時は野良猫が100匹以上に増えていました。これ以上増やさないための不妊・去勢手術が急務でしたが、そのためには手術代が必要です。にゃんサポート足尾の方々が自費や募金でまかなうにも限界があり、全頭を捕獲して手術を終えるまでに何年もかかることが予想されました。猫は生後6か月くらいで妊娠できるようになり、年2回程度出産します。少しずつ手術していたのでは追いつきません。一気に行わなければ効果が薄いのです。

そこで、以前からお世話になっていた県会議員の方に相談したところ、連合栃木さんを紹介してもらいました。最初

は加盟組織に募金をお願いしようかと考えていたのですが、ちょうど「ゆにふあん」がスタートしたタイミングで、連合栃木さんからの説明もあったので、ぜひクラウドファンディングをやってみたいと思いました。

25日間で目標金額に到達 追加支援で手づくり猫ハウスを設置

クラウドファンディング開始後は、にゃんサポート足尾の方々と協力して知人への声かけやチラシ配り、SNSでのPRを行いました。連合栃木さんにもずいぶん協力いただきました。地元紙の下野新聞に掲載されたこともあって支援金額はどんどん増え、募集開始から25日で目標金額の120万円を達成できました。

集まった支援金を元に、100匹を超えていた足尾町の猫たちをほぼすべて捕獲し、検査やワクチン接種、不妊・去勢手術などを行いました。その後、希望者がいれば里親に迎えてもらい、他は地域猫として、町の人々に見守られながら暮らしています。

また、短期間で目標金額を達成できたので、ネクストゴールとして198万円を設定し追加支援をいただきました。支援金は、冬の寒さが非常に厳しい足尾町で地域猫が生きるため、猫ハウスの製作に活用させてもらいました。収納ケースを改良した手づくり猫ハウスを30カ所以上に設置したところ、猫たちも気に入ってくれたようで、多くの猫が冬を越すことができました。

おかげさまで足尾町の多くの猫たちの命が救われました。賛同してくださった皆様に心から感謝しています。

ペットフードバンク、他団体との連携 これからも「ゆにふあん」を活用したい

これから実現したいことが2つあります。1つはペット

フードバンクの立ち上げです。地域猫へ餌やりをしているのは地元のボランティアの方々と、年金生活の高齢者がほとんどです。餌代は大きな負担になっています。一方、2017年度のペットフードの総出荷量は約60万t。そのうち廃棄処分される量は、年間約1%の6,000t

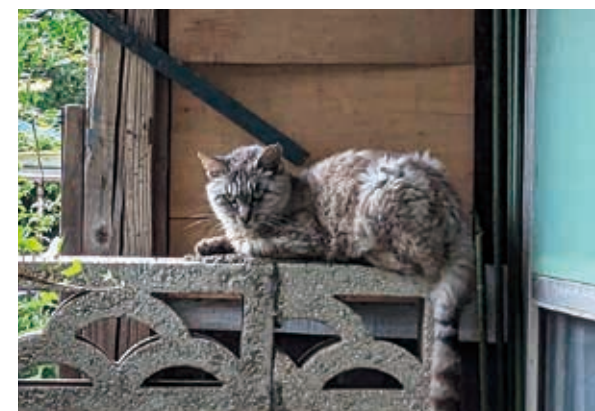
ともいわれます。このペットフードロスを有効活用すれば、餌やりの方々の経済的負担が軽減でき、その分の費用を不妊・去勢手術にまわすことも可能になるでしょう。ゆにふあんを利用して、ペットフードバンクの取り組みや個人宅で余ったペットフードの寄付などを募りたいと考えています。

もう1つは、動物保護団体の“横のつながり”をつくることです。私たちは犬猫の譲渡会を長くやっているためある程度の知名度があり、里親になるための条件も比較的幅を持たせていることから多くの里親希望者が集まってくれますが、近隣の県では譲渡会の参加者が少なく、里親がなかなか見つからなくて困っているという話をよく聞きます。このような問題も、団体同士の連携があれば解決に向かうのではないかと考えています。

また、一般的なクラウドファンディングは一度利用すれば終わりですが、ゆにふあんは持続的に活用できる点が良いと思います。さまざまな団体がPRのためにSNSを使うのと同じように、私たちがゆにふあんを情報発信の場として今後も活用していきたいです。



▲鹿沼市で定期開催している里親会



▲地域猫として町民に可愛がられています



▲足尾町の地域猫を守るために製作した猫ハウス



▲里親の決定を待つ子猫たち

ゆにふぁんフォーラム



登壇者紹介

連合総研
主幹研究員
中村 天江（なかむら あきえ）



1999 年リクルート入社、2009 年リクルートワークス研究所に異動。「働き方の未来」と「労働市場の高度化」をテーマに調査研究・政策提言を行う。2021 年 10 月からは連合総研で主幹研究員を務める。

著書・研究・調査レポート



採用の戦略



DIO 7・8月号
特集「開き、広がる、労働組合」



CSR 白書 2020
ソーシャルイノベーションを通じた社会的課題の解決に向けて

株式会社ピリカ
PR
土屋 明子（つちや あきこ）



企業の PR サービスの運営やメディア事業の立ち上げに従事し、2011 年にクラシックコミュニケーション株式会社を設立。翌年、株式会社パリュープレスと事業統合、代表取締役役に就任。2020 年に退任し PR フリーランスとして活動。2021 年よりピリカに PR として参画。

アプリ



ごみ拾いを楽しく、続けやすく！
世界最大のごみ拾い SNS

グリーンバード
代表
福田 圭祐（ふくだ けいすけ）



1990 年生まれ。青山学院大学卒業後、広告代理店へ入社。2016 年に NPO 法人 green bird へ参画。副代表を経て 2019 年に 3 代目理事長に就任。タピオカ専用ゴミ箱や、海洋プラスチックのアップサイクル事業など、ごみ拾いの枠を超えた新たな可能性に挑戦。

活 動



原宿表参道発信のごみ拾いプロジェクト



日本労働組合総連合
沖縄県連合会 副事務局長
石川 修治（いしかわ しゅうじ）



1976 年生まれ。2001 年より米軍基地内、沖縄 Exchange (Food 関連) に勤務。2014 年以降、全駐労沖縄地区本部青年部事務局長、ズケラン支部青年部長、支部執行委員、ズケラン分会長を歴任。2019 年に現職（連合沖縄副事務局長（全駐労沖縄地区本部執行委員））に就任。

日本労働組合総連合会
運動企画局長
春田 雄一（はるた ゆういち）



1993 年スズキ株式会社入社。スズキ自販東京（営業）、湖西工場（労務、生産管理）、本社管理部に勤務。2004 年スズキ労組支部委員、2006 年自動車総連中央執行委員に就任。2012 年に連合入局、2015 年経済社会政策局長、2021 年より現職。

I

基調講演

1. 社会、個人、企業「三方良し」の社会貢献

連合総研 主幹研究員
中村 天江

家族と職場以外の「つながり」は人生やキャリアを豊かにする

近年、社会貢献活動は、個人にとっても企業にとっても地域社会にとっても大事な「三方良し」の取り組みに変化しています。

日本は他国と比べ、人とのつながりが家族と職場の同僚に特に集中していることが分かっています。一方で、人とのつながりが多い人ほど幸福を感じることも分かっています。また、将来のキャリア展望を明るく描けるかどうかは、ボランティア団体や NPO などのコミュニティに所属している人は高いのに対し、同じ部署の同僚としか付き合いがない企業人は低いという調査結果もあります。VUCA^{※1}と呼ばれる不確実性の高い現代こそ、人とのつながりを広げることで、人生やキャリアが豊かになりやすいのです。

では、どんなつながりを、どのようにつくればいいのか。リクルートワークス研究所の分析から、「ありのままの自分でいられる」かつ「共通の目的がある」人間関係が最も望ましいことが分かりました。この 2 点を満たす人間関係をつくろうとしたとき、社会貢献活動は絶好の機会となります。社会貢献活動は強制されるものではなく、やりたい活動を自分で選択でき、かつ

「子どもを守りたい」「被災地の復興を手伝いたい」といった共通の目的をもった仲間が集まるからです。

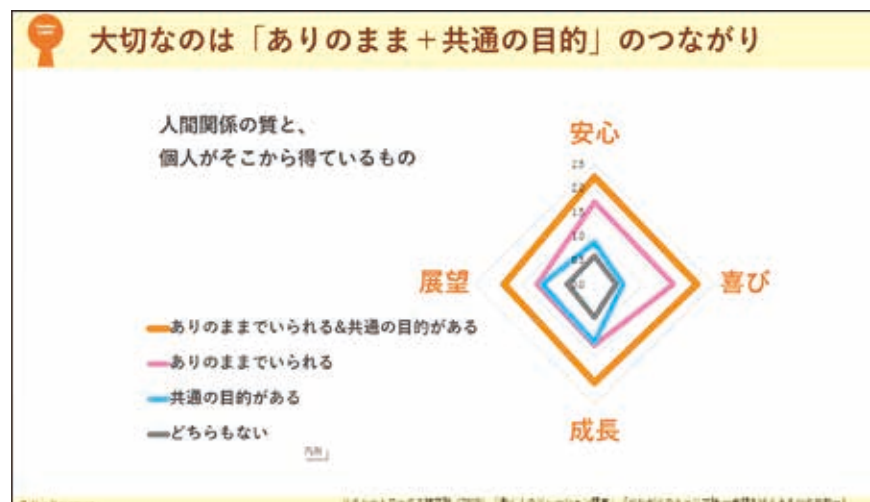
ボランティアに関心がある人は 6 割ほどいるのに、実際に経験している人は 2 割しかいません。ぜひ労組の皆さんには、このような「やってみたいのにできていない」人たちに向けて機会を提供していただきたいです。

社会貢献活動は社員の成長機会 大事にしたいのは活動の「中身」

さて、社会貢献活動は地域にとっても個人にとっても良い。というのでは、まだ「二方良し」です。近年の大きな変化として、企業にとっての「良し」が加わりました。ESG^{※2}や SDGs の注目度が高まり、利益だけを追求する企業ではないというアピールが必要になった現在、企業にとって社会貢献活動は戦略的人事施策になりつつあるのです。

経団連の調査で、企業にとっての社会貢献活動の役割や意義が、2005 年から 2020 年にかけて大きく変化したことがわかります。社会貢献活動を「経営理念やビジョンの実現の一環」とする企業は 37% から 83% に、「社員が社会的課題に触れて成長する機会」という回答も 4% から 53% へと激増しました。

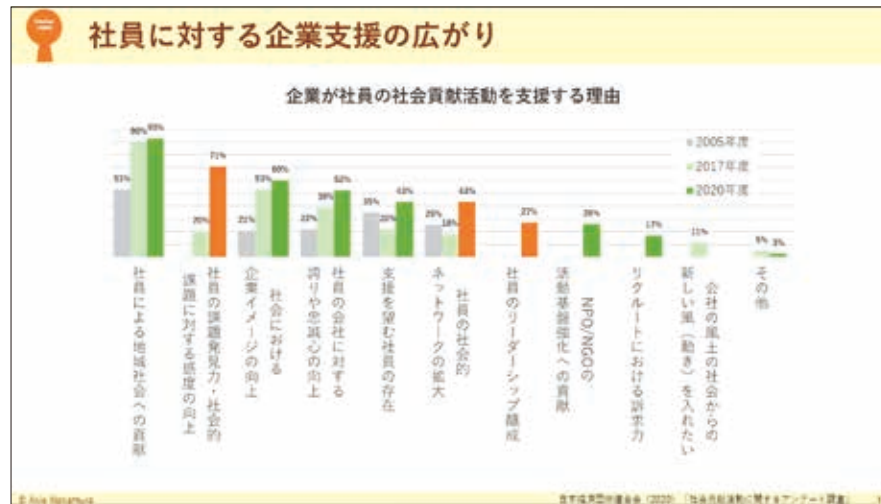
企業が社員の社会貢献活動を応援する理由も劇的に変化しました。「社員による地域社会への貢献」と考えている企業は 2010 年代後半から 9 割を超えています。「社員の課題発見力・社会的課題に対する感度の向上」は 20% から 71% に、「社員の社会的ネットワークの拡大」は 18% から 43% と大きく伸びています。2020 年に調査項目に追加された



「社員のリーダーシップ醸成」は27%です。つまり、社会貢献活動をしている社員は社会課題を見つけたり、外部ネットワークを広げたり、リーダーシップを発揮したりしてくれるであろうという、育成的な意味づけが含まれてきているのが近年の大きな特徴です。

社会貢献というラベルがついているなかに、いろいろな種類の活動があります。オリンピック・パラリンピックのスポンサー企業でボランティアを経験した社員の活動前後の変化を分析すると、自分とは異なるバックグラウンドをもつ人々と共に働く「オープンマインドの協働」と、自分や会社について振り返る「内省」を伴う活動をした人ほど、今後のボランティア意向やダイバーシティへの意識など、プラスの変化が多かったことが分かりました。

これまでの労働組合の社会貢献活動は、困っている人や地域を応援するために人を動員する活動が中心だったかと思います。それも非常に大切なことではありますが、今後は「新しい人と出会う協働し、内省を伴うような活動」を増やしていくことで、より充実した「三方よし」



の取り組みになるのではないのでしょうか。

※1 VUCA

V (Volatility: 変動性)、U (Uncertainty: 不確実性)、C (Complexity: 複雑性)、A (Ambiguity: 曖昧性)の頭文字をとった造語。先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態。

※2 ESG

E (Environment: 環境)、S (Social: 社会)、G (Governance: ガバナンス)の頭文字をとった造語。持続可能な世界実現のために、企業の長期的成長にはESGの三つの観点が必要という考え方。

2. ボランティアの楽しみ方、広げ方

グリーンバード 代表
福田 圭祐

ポイ捨てのない社会に向けて ごみ拾いのイメージを変えたい

グリーンバードは2002年に原宿・表参道からスタートした、「ポイ捨てのない社会」を目指して活動をしている団体です。結成当時は、今以上にポイ捨てが当たり前の時代でした。拾っても拾っても次の日には同じ場所に同じようにごみが落ちている。イタチごっこの状況をなんとかしたくて、私たちは街なかに「ポイ捨てしづらい空気」をつくることにしました。

そのためには、ごみを拾う人、つまり自分たちを目立たせる必要があると考えました。目立つためには仲間を増やさなければいけません。私たちはまず、ごみ拾いのネガティブなイメージを「おしゃれで、楽しくて、かっこいい」イメージに変えようと、お揃いのビブスをつくりました。また、初めて参加した人が楽しめる工夫もしました。参加者に渡すごみ袋は、一人1種類。可燃ごみ袋を持った人がペットボトルを拾ったら、不燃ごみ袋を持った人に声をかけなければならないし、逆も同様です。何度か繰り返すうちに打ち解けてきて、お互いに自然と世間話が始まるようになります。

参加のハードルを下げることも大切です。グリーンバードのごみ拾いは、身ひとつで参加できます。会員登録も、掃除用具の持参も不要。いつ来てもいいし、いついなくなってもいい、「できるかぎり」がグリーンバー

ドのモットーです。ごみ拾いを苦痛に感じてしまうと、次回の参加に踏み切れません。雨が降ればすぐに中止しますし、集合から解散までは正味1時間程度です。ごみが残ってしまうことも多いのですが、むしろ「拾い足りない、また拾いたい」という気持ちになる方が重要ではないかと思っています。

街をきれいにするだけじゃない ごみ拾いの先に見えてきたもの

グリーンバードに参加条件はないし、参加理由はなんでもOKです。環境問題に関心がある人ばかりでなく、「最近この街に引っ越してきたから」とか「学校の授業で必要だから」といった参加者も多くいますし、それでいいと思っています。ちなみに私自身も、最初の参加理由は「大学の推薦入試のため」でした。

参加者は年齢も職業もさまざまです。2～3歳のお子さんもいますし、代官山チームのリーダーは83歳。歌舞伎町のリーダーは現役のホストです。海外にもチームがあり、国籍も世代もバラバラの人々が参加しています。5年ほど前まで、新宿チームのリーダーは乙武洋匡（おとたけ ひろただ）さんでした。全盲の方が「ごみ拾いなら私もできるかも」と、盲導犬を連れて参加してくれたこともあります。グリーンバードは誰でも参加できる、社会貢献の入門編でありたいと思っています。

今はごみ拾いを通じた地域のコミュニティづくりを次の価値として見出しています。2018年に発生した西日本豪雨では、被災した岡山県倉敷市真備町でグリーンバードがボランティアとして活躍しました。真備町の町長さんから岡山チームのリーダーに直接電話があり、助けを求められたそうです。ごみ拾いの枠を超えて、困った時に頼られる存在にまで成長してきています。

ごみを拾うだけではなく、そもそもごみを捨てさせないことや、拾ったごみを何かに変えることにも挑戦しています。タピオカドリンクがブームになり、飲んだ後の容



器が道に散乱していた時は、ちゃんとごみ箱に捨てたくなるよう、タピオカ容器の形をしたごみ箱をつくりました。インスタ映えを狙ってみんな捨てに来るようになり、結果的に僕らがごみを拾う必要がなくなりました。

SDGs と関連して注目される海洋プラスチック問題もあります。私たちもまずはビーチクリーンを実施しましたが、そこで終わりではなく、集めたごみからコースターやウミガメのプラモデルなどをつくりました。ごみ拾いの思い出が、モノとなって返ってくるわけです。

全国各地でこのように、ごみ拾いに遊びの要素を取り入れ、新しい人を巻き込む挑戦をしています。街をきれ

いにするだけでなく、そこにどれだけ付加価値を提供できるかが、私たちの次のステージだと考えています。



3. ごみ拾い活動を促進するプラットフォーム

株式会社ピリカ PR
土屋 明子

延べ 250 万人が参加する ごみ拾いに特化した SNS アプリ

株式会社ピリカは「科学技術の力であらゆる環境問題を克服する」ことを目的に活動しています。現在はごみの自然界流出問題に着目し、まずは 2040 年までに自然界に流出するごみの量と回収されるごみの量を逆転させることをめざしています。本日は、ピリカの事業のひとつとして運営しているプラットフォーム「ごみ拾い SNS ピリカ」を紹介したいと思います。

ごみ拾い SNS ピリカは「ごみ拾いを楽しく、続けやすく！」をテーマに掲げた、世界最大のごみ拾い SNS サービスです。内容は至ってシンプルで、ごみを拾って写真を撮り、投稿するだけ。投稿には、一般的な SNS の「いいね」にあたる「ありがとう」がついたり、「暑い中ごみ拾いお疲れ様」といったコメントが届いたりします。

現在 121 の国と地域で利用されており、延べ 250 万

人が、累計 3.1 億個のごみを回収しています※。SNS ピリカを開けば、今も世界中のどこかで誰かがごみを拾っている様子を見ることができます。

無料アプリですが、自治体や企業には清掃活動のデータをカスタマイズして有償で提供しており、連合大阪さんにもご活用いただいています。清掃活動の促進はもちろん、組織内コミュニケーションの活性化を目的にお声がけいただくことも非常に増えています。

また、ピリカに蓄積されている「どこで誰がどんなごみを拾ったか」というデータは、大学や研究機関と連携し、研究に使われています。

活動を促進するピリカの仕掛け 4 つのポイント

ピリカのようなプラットフォームがあることによって、どのように活動が促進されるか社内でも分析したところ、4 つのポイントが挙げられました。

1 つめは「可視化」。ごみ拾いという活動のひとつひとつは小さなものですが、やはり「121 の国で」「3 億個の」ごみが拾われていることが見える化されると非常に大きなインパクトがあります。また、SNS ピリカで自宅近辺を見てみると、驚くほどたくさん拾っている人がいたりします。「こんなにたくさんの方が拾っている」「自分の身近にごみ拾いしている人がいる」、それなら私もやってみよう、と思った方も少なくないのではないのでしょうか。

2 つめは「ゲーミフィケーションの要素」、つまり人と競い合ったり、アイテムを集めたりなど、ゲームのように楽しんでもできる要素があるかどうかです。SNS ピリカでは、ごみ拾いを頑張るとバッジがもらえる仕組みがあります。バッジがほしいがためにごみを拾う人たちもいるので、こういう仕掛けはアクションの後押しになると思います。

3 つめは「オーディエンスも参加できること」。SNS ピリカの参加者は絶対にごみを拾わなければいけないわけではありません。誰かがごみを拾うのを見ていだけでもいいし、「ありがとう」を押すだけでもいいと思っています。南極でごみを拾った方がいたり、毎日ものすごい量のごみを拾っている方がいたり、そういう新たな世界を知り、楽しい発見をするだけで、次は自分もやってみようという後押しになります。オーディエンスとして誰でも参加できるという点は、プラットフォームのとても重要な要素だと思っています。

4 つめは「コアユーザーがもっと活動できる仕組みを提供する」ことです。SNS ピリカには、誰かと一緒にごみ拾いをしたい人がグループやイベントを立ち上げて人を巻き込む機能があります。「もっともっとごみを拾いたい」というコアなユーザーに、その思いを叶えられ



る場や仕掛けを提供することも大切だと思います。

ピリカの社内では、よく「見えざるヒーローをヒーローにする」という話が出ます。地道に活動している人たちをきちんと賞賛すること、それがプラットフォームやコミュニティの力だと思っています。

環境問題解決というゴールに向けた私たちの活動が、皆さんの参考になればうれしいです。

※ 2023 年 9 月 1 日時点

Ⅱ パネルディスカッション

これからのゆにふぁんのあり方

基調講演の後は、「これからのゆにふぁんのあり方」と題しパネルディスカッションを行いました。基調講演で講演いただいた中村天江氏がコーディネーターを担当。パネリストには、同じく講演いただいたグリーンバードの福田圭祐代表、株式会社ピリカの土屋明子氏、そして、連合沖縄の石川修治副事務局長、連合の春田雄一運動企画局長が登壇しました。なお、今回は Mentimeter（メンティメーター）を使い、会場の皆さんの声を集めながら意見交換しました。

ゆにふぁんの現状と課題と 連合沖縄での活動について

中村：パネルディスカッションに入る前に、春田さん、石川さんより活動の紹介をお願いします。

春田：私は 2 年前から運動企画局長として、ゆにふぁんを担当しています。2019 年に発足して以来ゆにふぁんの掲載件数は増えていて、2021 年には 400 件、2023 年 6 月では 600 件を超えています。ですが、中身を見るとその多くが事例紹介にとどまっているのが現状です。

ゆにふぁんの今後の発展に向けて、ステップ1「組織内・連携する諸団体の活動を見る化」、ステップ2「連携、参加・参画につなげる」、ステップ3「諸団体、地域市民との労働組合の繋がりを深める」ことに取り組みながら、社会貢献活動を行っていきたいと考えています。その意味では参加型の活動の掲載件数を増やし、社会課題解決につなげていきたいと考えています。

石川：連合沖縄青年委員会では社会貢献活動として、「にじの森文庫」という、絵本や児童書、漫画など 1,200 冊がそろう、子どもたちの進学などをサポートする場所に絵本や食料を寄贈しています。はじめは絵本を中心に寄贈していましたが、実際に訪れると団体では食事の提供をしていることも分かり、次の年から食料の寄贈を始めました。この他にも、毎年、年末に食糧支援「年末ワクワクお福分け隊」で、お米や年越しそば、野菜を中心に提供しています。また、他団体と連携し「ゆめ・みら

い基金」* を活用した支援も行っています。

社会貢献活動に参加した青年委員会、女性委員会の方からは、「ボランティア活動に個人的に参加するのはハードルが高いが、組合活動だと参加しやすかった」「地元紙に活動が掲載されたのが嬉しかった」などの感想をいただきました。また、「絵本などの支援を行った際に、現地から食料の支援もあれば助かるという声があった」という感想もありました。この経験から、まずは一度支援を実践したうえで、その支援先のニーズを確認しながら、継続していくことが大切だと思っています。

そして、社会貢献活動の取り組み内容や成果をゆにふぁんマップを通じて発信し、共感の輪を広げていきたいです。

活動に人を巻き込むには まずは自分が楽しいと思える ことにフォーカス

中村：ここからは本題である、ゆにふぁんの今後や労働組合と社会貢献活動をどう盛り上げていくかについて話を進めていきます。会場の皆さんから出た「社会貢献活動を企画するうえでの悩み」に関する意見を見ていきましょう。出た意見で気になるコメントありますか？

石川：やる気のない人を巻き込む方法、私も知りたいです。

土屋：やる気のない人を動かすのが 1 番難しいと思います。だからそれは後回しにして、自分のやりたいこと、



もっと楽しいと思えることにフォーカスするのがいいと思います。例えば、組合員が動いてくれなければ地域の人たちに相談し、地域と一緒に動いてくれる仲間を増やしていくことで活動は楽しくなるし、周囲にも楽しい雰囲気は伝わるのではないかと思います。

福田：どんな組織も、優秀な人が 2 割、普通の動きをする人が 6 割、貢献度の低い人が 2 割といった「2：6：2 の法則」の理論でいくと、我々は「6」の人に動いてもらうことに注力します。「6」の人も含めてみんなで楽しそうにしていたら最後の「2」の人も参加すればよかったと思うかもしれません。今すぐに動いてくれる人たちをもっと楽しませる方向に振り切ってもいいと思います。

多くの人に参加してもらうためには 選択肢を用意しておくことが大事

中村：次に、皆さんから出た活動内容を充実させるための工夫に関する意見を見ていきましょう。

石川：「飲み会をセットにしない」というご意見がありますが、労働組合って飲み会をセットにしがちです。それが好きな方もいれば、もちろん苦手な人もいますので、悩むところです。

福田：石川さんがおっしゃる通り、「強制しない」のは

大事だと思います。一方で、グリーンバードの歌舞伎町チームでのゴミ拾い活動は夜の 7 時から始まり、終了後は必ず飲み会がセットで、メンバーの半分以上が飲み会目的に來ています。メンバーに現役のホストがいて、その人のホストクラブにみんなで行くこともあり、そうした非日常に魅力を感じている人もいます。ただ強制はせず、来たくない人は解散という選択肢があるのは大事だと思います。

活動の PR のポイントは 見てほしい人、 掲載する場所を考えること

中村：次に、ゆにふぁんのサイトの使いやすさについて、皆さんの回答を見てみましょう。問題ない 20%、使いにくい 25%、使い方がわからないのが 56% ですね。春田さんいかがでしょうか。

春田：素直に、結果を受け止めます（苦笑）。使い方がわからない原因を考えるとあります。

そもそも周知の問題があり、ゆにふぁんマップにアクセスするまでも課題があると思っています。まずゆにふぁんマップを知ってもらい、そこから好事例を参考にいろんな方面につなげていく、支え合い・助け合いの結節点としての機能を果たしていくためにはどうすればいいのか、皆さんのご意見聞きながら今後に活かしていきたいです。

*ゆめ・みらい基金

沖縄の 1 人当たりの所得は全国最下位で、子どもの約 3.3 人に 1 人が相対的貧困という状態です。つまり、親の貧困＝子どもの貧困という貧困の連鎖が大きな課題です。「ゆめ・みらい基金」は、会員、協力団体、そして県内の各労働団体と共に、この貧困の連鎖を断ち切り、子どもたちの夢と未来を支えるための取り組みを協働で取り組んでいます。



土屋：このサイトは誰にとって使い勝手が良くなってほしいですか？

春田：まずは連合の組織内の人に分かってもらいたいです。最終的には地域の方と一緒に活動を広めていくためにも、一般の人とつながりたい気持ちもあります。

中村：ゆにふぁんの活動は、一般の人にも参加を告知できる活動と組織内の活動、どちらが多いのですか？

春田：組織内の活動が多いですね。ただ、ゆにふぁんの目的は、労働組合が社会貢献活動を行っていることを知ってもらうことなので、一般の人にもっとアピールしていきたいです。

中村：すでに活動に参加されている組合員の皆さんは、こういったモチベーションなのでしょうか？

石川：そもそも組合活動に関わっている多くの方は、誰かの役に立ちたいという思いで取り組みに参加されています。そしてたまたま、支援先が子ども食堂であったり清掃活動であったりします。基本的には、組合のスケールメリットや組織力を活かして何かをしたいという感覚の人が多く印象です。

中村：PRの専門家である土屋さんから見て、PR活動について何かご意見はありますか？

土屋：活動のPRでは、誰に届けたいかをきちんとイメージすることが大事です。活動をローカルの人に知ってもらいたいのであれば、PRする場所はやはりローカルメ

ディアが適していると思います。ローカルメディアも地域で頑張っている人たちを取り上げたいというモチベーションがあるので、すごくフィットすると思いますね。

気軽に書き込める機能があれば、一般の人にもアクセスしやすくなる？

中村：では今後、ゆにふぁんマップにどんな機能を追加したらいいと思いますか？

春田：つながるための掲示板があってもいいと思っています。私のよく行く銭湯には、悩みなど何でも書ける掲示板があるんです。そこには、ひとつの書き込みに皆が関連したことを書いていて、かなり書き込まれています。それを見て、今、個々に「つながる」ことが求められているんだと感じました。

中村：土屋さんは、会場で皆さんから上がっている意見も含めてどう思われますか？

土屋：皆さんの意見から思いついたアイデアとして、住民の声が聞けるといいのではないかと思います。住民の声が投稿できる場所があると一般ユーザーがアクセスするモチベーションもでき、ここで解決できるという期待につながり、プラットフォームとして機能するのかなと思いました。

限られた予算のなかでどう活動を進めていくか

中村：次に、予算に限りがあるときの活動の進め方について何かご意見があればお願いします。

土屋：ピリカも予算は決して多くはない会社なのでいつもこの悩みに直面しています。予算がない場合は知恵を絞って勝負するしかありません。そこまでリソースを割いてやりたいか、やる必要があるものなのか、それとも予算を理由に辞めるか、という話なのかなと思いました。

中村：会場から「労働組合とコラボするアイデアはあり

ますか？」という意見が出ましたが、これについてはどうですか？

福田：外部でコラボというより、労働組合自体が全国に散らばっていて点と点が繋がっていないのかもしれないので、まず「組織内のみんなで一緒にやる」が一歩目かなと思います。

例えば、タバコの吸い殻拾いを1週間やるとしましょう。何本のタバコを拾ったか可視化することで、みんなで一緒に活動している、というつながりも生まれると思いますし、達成感も味わえると思います。また、これはお金をかけなくてもできますよね。

社会貢献活動に必要なのはわくわく感 今日出た意見を踏まえて活動を続けていく

中村：最後に、ここまで出た意見も踏まえ、パネリストの方、感想を一言ずつお願いします。

石川：福田さんの講演のなかに「真似る」ことについてのお話がありましたが、私もゆにふぁんマップで他の組織の活動を真似してみています。そういった意味でもゆにふぁんマップでの好事例の共有は絶対必要だと思います。また、今日の場のような、組織外の方々のお話をしっかり聞いてそれを労働組合の運用や社会貢献活動に活かしていくのも大切だと思います。こういった場をぜひどんどんつくっていただきたいです。

土屋：今日、労働組合の活動の話をたくさん聞き、ほかにさまざまな活動があるのだろうと可能性を感じ、今後を楽しみに思いました。

私からはターゲットの話をしましたが、「なぜ労働組合が社会貢献活動をやのか」を深掘りするのも、ひとつのアプローチだと思います。ゆにふぁんが、いろんな労働組合の色とりどりの課題感やミッションを発信するようなプラットフォームになったら、ドラマチックになるのではないかと思います。



福田：言おうとしたことはほとんど土屋さんに言われてしまいました（笑）。石川さんからもありましたが、私が今日お話ししたことも、どんどん真似ていただければと思います。私は出張が大好きですし、グリーンバードは全国に60チームほどあるので、ぜひいつでも相談してください。

春田：ご意見をいただき本当にありがとうございました。真摯に受け止めて、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

ピリカさんはもともと連合大阪の活動の中で連携していました。今回グリーンバードさんにお声がけしたのは、私の息子がグリーンバードさんのゴミ拾い活動をしたのがご縁なんです。参加した息子が「ただのゴミ拾い活動で終わりではなく、この活動を通じてコミュニケーションが深まるなどわくわくする」と言っていたのが印象的でした。社会貢献活動のなかで、わくわく感を持たせるのは私もこれから工夫していきたいポイントの1つです。

また、今はサイトに好事例を載せていますが、点と点をつないで線にしていけるべく、活動を連携させたり、それこそ先ほど話に出たコラボを模索していくのもひとつの手かな、と思いました。

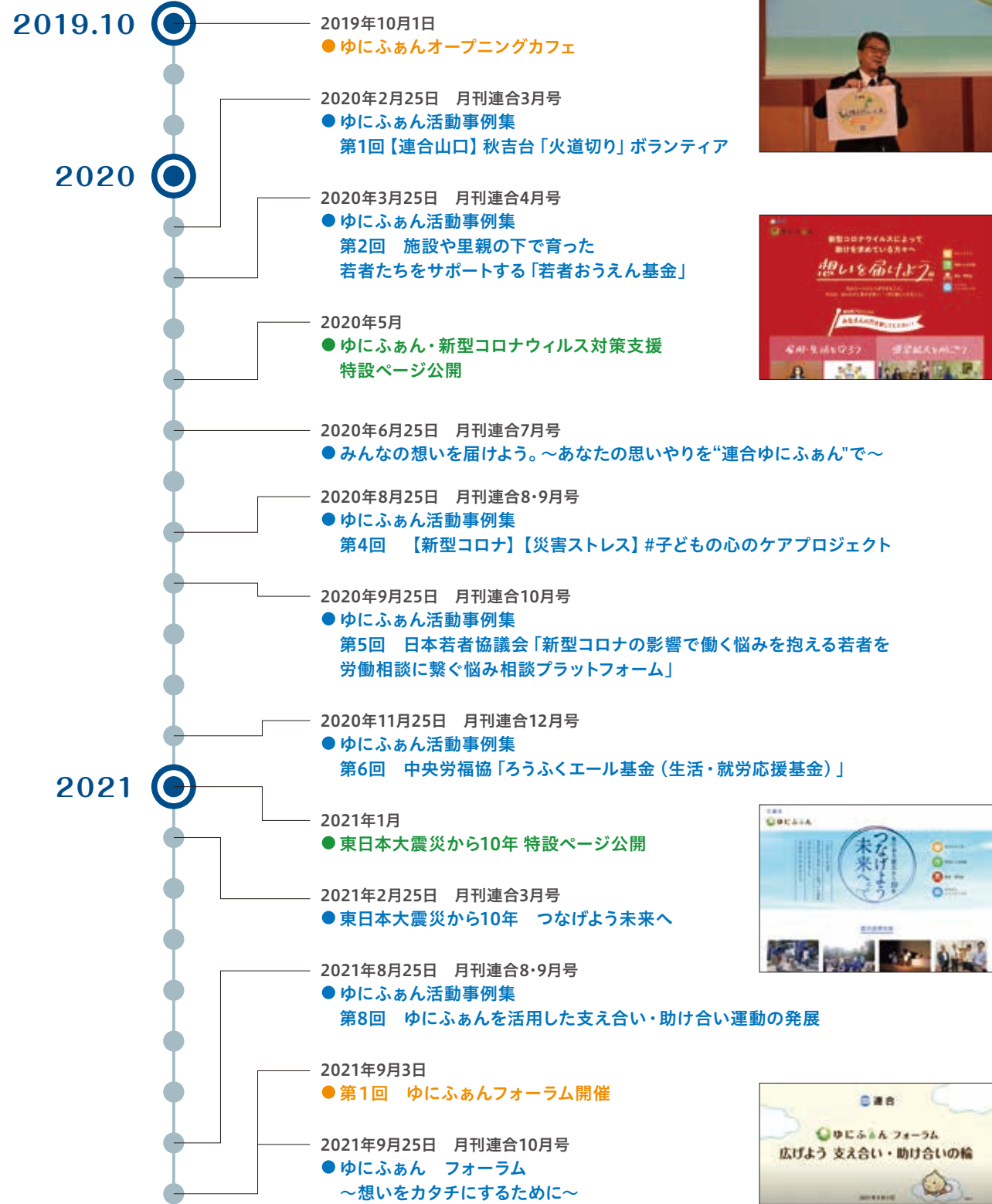
同じ活動を続けていくことで何かが生まれるきっかけやヒントになることもあります。限られた予算のなかで、何ができるのか、活動をしながら考えていきたいと思っています。本当に貴重なご意見いただきまして、ありがとうございました。

資料



ゆにふぁん 活動の記録

● …… ゆにふぁんマップ ● …… イベント ● …… 月刊連合、季刊RENGO



おわりに

社会課題解決に向けた 支え合い・助け合い活動の結節点として

日本労働組合総連合会 総合運動推進局 運動企画局長 **春田雄一**

ゆにふぁんレポートをご覧いただきありがとうございます。

「ゆにふぁん」の言葉の由来を改めて確認してみると、社会に役立てるためのお金を集める「ファンド (fund)」、職場や労働組合を越えたつながりを楽しむ「ファン (fun)」、さらにはこれらの活動を通じて労働組合のファン (fan) を増やしたい、といった思いが込められています。

ゆにふぁんが立ち上がり4年がたちました。私は2年前からゆにふぁんを担当し、まさに実践していく立場になりましたが、これまでの活動を振り返ると、とりわけ直近ではコロナ禍で想定外の事態が広がり、女性、若者、子どもの貧困をはじめ、エッセンシャルワーカーなど厳しい状況下で働く人達の困難がクローズアップされました。こうした状況にあわせ、ゆにふぁんではHP上の特設ページに活動を集約し、SNSを活用するなどして支援を呼びかけました。また近年では、毎年のように全国各地で自然災害が頻発・甚大な被害が発生するなど、私たちは常に大きな自然災害のリスクにさらされています。このような中、様々な社会的課題の解決に向けた支え合い・助け合い活動の結節点として、ゆにふぁんの役割の重要性が高まったように感じます。

連合は、「2024～2025年度運動方針」において、志を同じくする仲間の思いと力を、幅広く国民的課題や地域の課題に対して発揮していくとともに、ゆにふぁんの社会貢献活動を通じて仲間の思いを結集することで、運動の力を高めていくことを掲げています。ゆにふぁんは、多くの人の多様な活動を見える化して、これから活動を始めようとする人の背中を押し、そして志のある人、行動を開始した人同士をつなぐことのできる仕組みです。この厳しい社会情勢を、みんなで力を合わせて乗り越えるために、組合員、地域住民、NPO・NGOなどとのつながりの深化に取り組むとともに、ゆにふぁんのさらなる浸透・拡充に向けて活動を推進していきます。



ゆにふぁんレポート

2022-2023

日本労働組合総連合会(連合)